

# 平家物語の擬音語・擬態語

## —延慶本、覚一本、百二十句本の比較から—

中 里 理 子\*

(平成23年9月29日受付；平成23年10月31日受理)

### 要 旨

「平家物語」の擬音語・擬態語（オノマトベ）の特徴を見るために、読み本系の延慶本、語り本系の覚一本と百二十句本を対象に調査した。和語系オノマトベについては、擬音語は、①弓矢に関するもの、②刀に関するもの、③軍勢や兵を中心に大勢の動きを表すものを取り上げ、擬態語は、①素早い動作を表すもの、②力強い動作を表すもの、③泣く様子を表すものを取り上げて、比較検討した。各本の共通点から、弓矢の音の描写は工夫されているが刀の描写は他の擬音語を代用していること、素早い動作と力強い動作を表す擬態語は当時の一般的表現であったことなど、「平家物語」のオノマトベの特徴を見て取ることができた。一方、各本の相違点からは、覚一本に定型的表现が目立つことが見て取れた。漢語系オノマトベについては、各本とも主に自然描写に使われていた。語り本系の二本は読み本系よりも語数が少なく、一般的な漢語が使われていた。

### KEY WORDS

擬音語	Imitative Word	擬態語	Mimetic Word
和語系オノマトベ	Onomatopoeia of Japanese Origin	漢語系オノマトベ	Onomatopoeia of Chinese Origin
定型的表现	Fixed form		

## 1. 研究の目的

従来、平家物語の語彙の特徴として、擬音語・擬態語（以下、総称としてオノマトベを用いる）の使用が指摘されている。古くは山田孝雄の『平家物語の語法 下』<sup>1)</sup>に指摘があり、また、西田（1978）にも「擬声語、擬態語、色彩語など感覚的な語」が特徴として挙げられている<sup>2)</sup>。このような指摘が古くからなされているものの、平家物語のオノマトベ（擬音語・擬態語）に焦点を当てて研究したものはほとんど見られない<sup>3)</sup>。そこで、『平家物語』のオノマトベの特徴を整理するために、平家物語の諸本を対象にオノマトベの調査を行っていくこととした。

『平家物語』の諸本は語り本系と読み本系とに大別される。前者には、覚一本、屋代本、百二十句本などがあり、後者には、延慶本、長門本、源平盛衰記などがある。筆者は先に、読み本系の中から『延慶本平家物語』（以下、延慶本）を取り上げ、オノマトベの特徴を整理した<sup>4)</sup>。小川（2008）によると、延慶本は「平家諸本の中でも「古態」を伝えるもの」であり、「延慶本と覚一本との文章を比較すれば、延慶本のような雑纂な文体から、覚一本のような洗練された文体へと進む形成過程もよく分かる」と述べられている<sup>5)</sup>。そこで今回は、古態である延慶本に対して、それとは対照的な覚一本と、同じく語り本系の百二十句本を取り上げてオノマトベを調査し、これら各本のオノマトベの特徴を比較しながら整理した。

延慶本は読み本系に分類されることもあり、先の調査では、漢語由来のオノマトベ（以下、漢語系オノマトベ<sup>6)</sup>）が多く使用されていた。いわゆる和漢混淆文によって書かれた平家物語は、語り本系の諸本においても、同時代に作られた擬古物語などと比べて漢語系オノマトベの出現率が高いことが予想される。従来のオノマトベ研究では、もっぱら和語系オノマトベが対象とされてきたが、特に古語においては、日本語のオノマトベとして扱ってもよいような漢語系オノマトベが存在し、その役割も大きいと考えられる。そこで本研究では、和語系オノマトベと同様に漢語系オノマトベも研究対象として取り上げることとした。

## 2. 調査対象と諸本の違い

擬音語・擬態語を調査した諸本は以下の通りである。

『延慶本平家物語』：『校訂延慶本平家物語』汲古書院。底本は大東急記念文庫蔵「応永書写延慶本平家物語」。

『覚一本平家物語』：日本古典文学全集『平家物語』上・下。岩波書店。底本は龍谷大学図書館所蔵平家物語。

『百二十句本平家物語』：『平家物語百二十句本』高橋貞一校訂，思文閣。底本は京都総合資料館本。

\*各本から抽出したオノマトペの一覧を稿末に掲載した。

以上の三つの諸本に、さらに読み本系の「長門本」、キリシタン資料の「天草版平家物語」を加えて、平家物語諸本の違いを、那須与一の一場面を取り上げて対照してみたい<sup>7)</sup>。(波線部は擬音語・擬態語。)

### ◎延慶本平家物語

余一鏑取テハゲテ、十二束二伏ヨ引テ、シバシカタメテ兵ト射タリ。浦ヒヅケト海ノ面ヲ遠鳴シテ、五六段ヲ射渡シ、扇ノ蚊目ハタトイテ、二ニサトゾサケニケル。一ハ海ニ入テ波ニユラル。一ハ一丈計空へ上ル。折節嵐吹テ地ニモヲトサズ、ソラニ吹上テ舞遊ブ。平家ノ方ニハ是ヲ見テ、船バタヲ叩キ、船屋形ヲ叩キ感ケリ。源氏ノ方ニハ前ツ輪ヲ叩キ、エビラヲ叩テドゞメキケリ。夕日ニカ、ヤキテ波ノ上ニ落ケルハ、秋ノ嵐ノチリシクカトゾ覺ヘケル。敵モ御方モ是ヲ見テ、一同ニアドソ云合ケル。

### ◎覚一本平家物語

与一鏑をと(ッ)てつがひ、よ(ッ)ひいてひやうどはなつ。小兵といふちやう、十二束三ぶせ、弓はつよし、浦ひゞく程ながなりして、あやまたず扇のかなめぎは一寸ばかりをいて、ひ(イ)ふつとぞゐき(ッ)たる。鏑は海へ入りければ、扇は空へぞあがりける。しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさ(ッ)とぞち(ッ)たりける。夕日のか、やいたるに、みな紅の扇の日いだしたるが、しら波のうへにたゞよひ、うきぬしづみぬゆられければ、奥には平家ふなばたをたゝいて感じたり、陸には源氏ゑびらをたゝいてどよめきけり。

### ◎百二十句本平家物語

こひやうなれば、十三ぞく、かぶらとつてつがひ、しばしたもちてはなつ。ゆみはつよし。うらにひゞくほどになりわたりて、あふぎのかなめよりうへ、一すんばかりをめてひやうふつといきつたれば、あふぎこらえず、三ツにさけ、そらへあがり、風に一もみもまれて、うみへざつとぞちりたりける。みなぐれなぬのあふぎの日いだしたるが、ゆふ日にか、やめて、しらなみのうへにうきぬしづみぬゆられければ、おきには平家ふなばたをたゝめてかんじたり。くがには源氏ゑびらをたゝめてどよめきけり。

### ◎長門本平家物語〈読み本系〉(『長門本平家物語』麻原美子・小井土守敏・佐藤智広：勉誠出版)

矢つかは十二そく、飽まで引て、しはしかためてはなちたれば、弓はつよし、海のおもてになかなりして、あやまたす、かなめ所を一寸はかりあけて、ひいはたと射たり。あふきは空にさつとあかる。紅の扇の夕日にか、やきて、そらにしはしひらめきたるそおもしろき。海おもてにざとおちて、しらなみにこそうかひたれ。龍田河の紅葉の、河瀬の浪に散まよふにことならず。月出したるあふきの、浪のうへにたゞよひたるかおもしろきに、くかにはゑびらをたゝきてとよむ。海にはふなはたをたゝきてかんしけり。

### ◎天草版平家物語(『天草版平家物語対照本文及び総索引』江口正弘：明治書院)

小兵なれども、十三束の鏑とつてつがい、しばしたもつて放すに、弓は強し、浦に響くほどに、鳴りわたつて、扇の要から上一寸ばかりをいてひつぷつと射切つたれば、扇こらえいで三つにさけ、空えあがり、風に一もみもまれて、海えざつと散つた 皆紅の扇の日いだいたが、夕日に輝いて白波の上を浮きぬ、沈みぬ揺られた：陸海上の敵味方船端をたたき、籠をたたき、一度にどつとほめて、しばしわ鳴りも静まらなんだ。

伝本によって、オノマトペを用いる箇所、及び、使用されるオノマトペが異なっていることがわかる。オノマトペが異なる例を、扇を射る音の描写と扇が海に散る描写の二例で見よう。

扇を射る音 延慶本「ハタト」、覚一本「ひ(イ)ふつと」、百二十句本「ひやうふつと」

長門本「ひいはたと」、天草版「ひつぷつと」

扇が海に散る様子 延慶本「サト」、覚一本「さ(ッ)と」、百二十句本「ざつと」

長門本「さと」、天草版「ざつと」

扇を射る音は全ての本で異なっており、扇が海に散る様子は、「さと」または「ざつと」のいずれかになっている。このように、那須与一の一場面だけを見ても、本によって大きな違いが見られる。本研究では、諸本の違いを念頭に置きつつ平家物語のオノマトペ全体の傾向をまとめ、その上で諸本の違いにも言及したいと考えている。

### 3. 対象とする漢語系オノマトペ

一般に擬音語・擬態語（オノマトペ）を取り上げる場合は、和語（和語系オノマトペ）を指す。しかし、漢語由来の語（例えば「汽車がゴウゴウと走る」「太陽がサンサンと照る」「目がランランと光る」等）にも、擬音語・擬態語らしさが感じられるものがある。これらの語には「轟々」「燦々」「爛々」という漢字表記があり、言語音と意味内容との間のつながり（有縁性）があるというオノマトペの特性が当てはまらない、ということもできる。しかし、これらの中には、漢字表記を持つ漢語であるという意識が薄れ、和語のオノマトペと同様に言語音の響きと意味内容の対応が感じられるものもある。日本語の中で、漢語系オノマトペは和語系オノマトペの発達に影響を与えていると考えられ、また、中世・近世には日常語にも多くの漢語が見られることもあり、平家物語のオノマトペを研究する際に漢語系オノマトペも取り上げるべきであると考えられる。

漢語系オノマトペは、金田一（1978）による分類のうち、「漢字二字のもの」の一部を取り上げる。以下に、「漢字二字のもの」の語形式（1）～（9）を抜粋する。

- |                |                  |                   |
|----------------|------------------|-------------------|
| (1) 「一焉」の形のもの  | (2) 「一乎」の形のもの    | (3) 「一爾」の形のもの     |
| (4) 「一若」の形のもの  | (5) 「一如」の形のもの    | (6) 「一然」の形のもの     |
| (7) 同じ語根を重ねたもの | (8) 同じ子音の拍を重ねたもの | (9) 同じ韻をもつ拍を重ねたもの |

今回はこの分類のうち、和語系オノマトペの語形式と重なるものを取り上げる。それぞれの語形式を比較すると、和語系オノマトペの「AッAッ」「AンAン」「A-A-」「ABAB」という語形式が、漢語系の「(7) 同じ語根を重ねたもの」（「怏々」など）と重なる。和語系オノマトペは疊語形式が多いとされており、漢語系オノマトペも疊語形式を取り上げるのがよいと思われる。また、和語系オノマトペは、「ドタバタ」のような「ABCB」の語形式や、「AッAッ」「AンAン」「A-A-」「ABNCBN」「ABリCBリ」の語形式に見るように、語尾の音を合わせる語形式が見られることから、それに近い漢語系の「(9) 同じ韻を持つ拍を重ねたもの」（「安閑」など）も調査対象に加える。

### 4. 和語系オノマトペの特徴

各本に見る擬音語・擬態語の延べ語数、異なり語数を以下に示す。（オノマトペは、和語系オノマトペの総数<sup>8)</sup>である。擬音語と擬態語とで重なっている語は1語と数えた<sup>9)</sup>ために、擬音語・擬態語の合計数とオノマトペの総数は数値が異なっている。）

諸本		オノマトペ	擬音語	擬態語
延慶本	異なり	63	24	42
	延べ	153	81	72
覚一本	異なり	52	19	35
	延べ	236	89	147
百二十句	異なり	45	15	31
	延べ	178	61	117

読み本系の延慶本は語り本系の二本よりも異なり語数が多く、多様なオノマトペが使われていることがわかる。しかし、延べ語数では語り本系の覚一本、百二十句本の方が多く見られる。特に覚一本では擬態語が多く使われていることが見て取れる。

擬音語と擬態語を比べると、延慶本では延べ語数で擬態語より擬音語のほうが多い点特徴的である。覚一本、百二十句本では異なり語数、延べ語数ともに、擬態語のほうが多く見られた。

#### 4. 1 擬音語

『日本語学研究事典』「平家物語」の項に「写音・擬声の和語副詞に富む（エイ・ヲウ・カラカラ・カラリなど）」<sup>10)</sup>という指摘があるように、擬音語の使い方は平家物語の表現の大きな特徴の一つである。先に延慶本のオノマトペを調査した際に多く見られたものを参考に、①弓矢に関するもの、②刀に関するもの、③軍勢や兵を中心に大勢の動きを表すものを取り上げる。

## ①弓矢に関するもの

延慶本：「サラリサラリト」1例、「ハタト」2例、「ヒフツト」1例、「ヒヤウド／兵ド」8例

覚一本：「からと」1例「からりと」1例、「ひ（イ）ふつと」2例、「ひやうど」6例、「ひやうづばと」1例、  
「ひやうふつと」5例

百二十句本：「からと」1例、「ひやうど」3例、「ひやうふつと」2例

以下に例を挙げる。(延)は延慶本,(覚)は覚一本,(百)は百二十句本を指す。(以下同じ。)

例1：余一 箭<sup>かぶら</sup>取テハゲテ、十二東二伏<sup>よつひい</sup>ヲヨ引テ、シバシカタメテ<sup>ひやう</sup>兵ド射タリ。(延)

例2：ふりあふぎ給へるうち甲を、三浦の石田次郎爲久お(ッ)か、(ッ)てよ(ッ)ひ<sup>ひやう</sup>あてひやうふつとある。(覚)

例3：ゆみをうしろへ<sup>からと</sup>なげすて、ゑびらもとゐてかはへなげ入。(百)

覚一本の「ひやうど」6例は全て「よつび（イ）てひやうど（ゐる／放つ）」と使われており、「ひやうふつと」5例中3例が「よつび（イ）てひやうふつとゐる」と使われていた。延慶本は「ヒヤウド／兵ド」8例のうち、「ヨクヒイテ兵ド射タリ」3例、「能引テヒヤウド放ツ」1例であり、百二十句本は「ひやうど」3例のうち「よつびゐて（中略）ひやうどゐる」が1例、「しばし（かためて／たもちて）ひやうどゐる」2例であった。延慶本、百二十句本と比べて、覚一本では「よつび（イ）てひやうど（ゐる／放つ）」「よつび（イ）てひやうふつとゐる」が定型的表現になっていることが窺われる。

## ②刀に関するもの

延慶本：「カラリト」1例、「サラト」2例、「丁ド／打ド」4例、「ハタト」2例

覚一本：「ちやうど」4例、「はたと」2例

百二十句本：「からからと」1例、「ちやうど」2例、「はたと」1例

例4：行家ツゞキテ<sup>ちやう</sup>丁ド切レバ、昌命、又ムズト合ケル程ニ(延)

例5：あそこの面道にお(ッ)かけては、<sup>はたと</sup>はたときり、こゝのつまりにお(ッ)つめては<sup>ちやう</sup>ちやうどきる。(覚)

例6：二ツのつぎを、つかさやをとり、しやうじによせかけたてられけるが、<sup>からからと</sup>からからとたふれあひ、(百)

例7：文学懐ヨリ七寸計ナル刀ノ柄ノ馬ノ尾巻タルガ氷ナムドノ様ナルヲ、<sup>サラト</sup>サラトヌキテ(延)

刀を合わせる描写は、数も種類も弓矢の描写より少なく、当時の合戦は集団戦が中心で、個人対個人の接近戦ではなかったことを窺わせる。いずれの本でも刀を打ち合わせる擬音語には「ちやうど」「はたと」が使われており、この二語が刀の音を表す一般的な擬音語であったようである。しかし、「ちやうど」「はたと」は戸や障子を立てる音などにも多く使われており、刀に限らず大きな音を表す時に使われた擬音語であったと思われる。弓矢の場合は矢音独特のオノマトペが見られたのに対して、刀は刀独特のオノマトペにはなっていない。

③軍勢や兵の動き等に関するもの<sup>11)</sup>

延慶本：押し寄す・引く…「ザト」5例「ザツト」2例「ハト」1例「バト」1例

河に入る・渡る…「ガブト」1例、「ザト」8例、「ザツト」4例、「ツブツブト」1例

鬨の声………「ドト」2例、「ハト」1例、

大勢が笑う…「ドット」1例、「ハト」8例

覚一本：押し寄す・引く…「ざ(ツ)と」9例、「ば(ツ)と」3例

河に入る・渡る…「ざ(ツ)と」9例、「ざ(ン)ぶと」1例

鬨の声………「ど(ツ)と」14例

大勢が笑う…「ど(ツ)と」4例、「は(ツ)と」2例

百二十句本：押し寄す・引く…「ざつと」13例

河に入る・渡る…「ざつと」4例、「ざぶと」1例「ざんぶと」1例

鬨の声………「どつと」12例

大勢が笑う…「どつと」8例

例8：中ニ取籠ラレテ半時計タ、カヒテ、ザツト破イテイデタレバ(延)

例9：百騎ノ勢クツバミヲ並テ、一騎モサガラズ、千隅河ザトワタス(延)

例10：源氏一万騎おしよせて、時をどつとつくる。(覚)

例11：てきもみかたもこれをき、一どにどつとぞわらひける。(百)

延慶本はここで取り上げた範囲を見ても擬音語の種類が多い。他の二本に比べて、場面に応じて様々な擬音語を使い分けて射たのではないだろうか。ただし、関の声に関しては、覚一本、百二十句本では「ときをどつとつくる」で統一され、多くの例が見られたのに対して、延慶本では擬音語はあまり使われていない。例えば、例10(「覚一本」巻九)と同じ場面を見てみよう。

◎百二十句本：げんじ一まんよき、三りの山をうちこえて、にちの山ぐちへをしよせ、ときをどつとぞつくりける。

◎延慶本：(前略)一万余騎ニテ、三草山ノ西ノ山口固メタル平家ノ陣へ押寄タリ。

覚一本、百二十句本に対して、延慶本では関の声を挙げる記述がない。このように関の声の記述が少ないためにそれを表す擬音語も少ないことも考えられる。

笑い声に関しては、覚一本、百二十句本では「どつと」が多く使われるのに対し、延慶本では「ハト」が多く、読み本系と語り本系で違いが見られた。

以上の他、頻度が高かった擬音語は「どうど」である。延慶本は4例、覚一本は9例、百二十句本は1例であった。

例12：おしならべひ(ッ)く(ン)で、どうどおつ。(覚)

特に覚一本において、「落つ」「倒る」等のダイナミックな動きに伴う大音声を表す際に、「どうど」が効果的に使われていたことが窺える。

#### 4. 2 擬態語

読み本系の延慶本と比べて語り本系の二本は、異なり語数という点ではやや少ないが延べ語数はかなり多く見られる。延べ語数が多かった語のうち、①素早い動作を表すもの、②力強い動作を表すもの、③泣く様子を表すものを取り上げる。

##### ①素早い動作をあらわすもの

延慶本：「サト」3例、「サツト」1例、「ツト」29例

覚一本：「さ(ツ)と」4例、「さらさらさら」と1例、「つと」3例、「つ(ツ)と」19例

百二十句本：「さつと」4例、「さらさらと」1例、「つと」13例、「つつと」3例

例13：残二人シコロヲカタブケテ、ツト寄ケルヲ、左右ノ脇ニカヒハサミテ、(延)

例14：びんづらゆひたる童子の御車の前をつ(ツ)と走りとおるをご覧すれば(覚)

例15：つらぬきぬひではだしになり、なぎなたのさやをはづみて、はしのゆきげたをさらとはしりわたる。(百)

素早い動作の多くが「つと/つと」で表されている。「つと/つと」は、「入る/出づ/寄る/参る/通る/いでく/走る」など、主に出処進退の際の素早い動きを表している。三つの本に大きな違いは見られない。平家物語諸本に共通した特徴と言えるだろう。

##### ②力強い動作

延慶本：「ハタト」2例、「ヒシト」2例、「ヒタト」4例、「ムズト」11例

覚一本：「がはと」1例、「か(ツ)ぱと」1例、「ぐ(ツ)と」1例、「ちやうど」2例、「づんど」1例、

「はたと」2例、「ひしと」2例、「ひしひしと」3例、「ひたひたと」2例、「むずと」16例、

「むずむずと」1例

百二十句本：「かつぱと」2例、「づんと」3例「むずと」19例、「はたと」1例、「ひしと」1例、

## 「ひしひしと」2例、「ひたひたと」2例

例16：与一ガ胡録ノアワヒニヒタト乗居テ、甲ノテヘンノ穴ニ手ヲ指入テ、ムズト引アヲノケテ（延）

例17：物はきながら、しや（ッ）つらをむずとぞふまれける。（覚）

例18：たかいびきかひてねたりけるが、すでにかうとおぼえけるとき、かつばとおき、ふねのへいたにたつて（百）

各本とも「むずと」が多く使われている。稿末の資料「各本のオノマトペ一覧」の表に示したように、延慶本は「むずと」11例が、「取ル／座ニツク／組デ落ツ／打ツ／キル／フム／引キアオノク／ヲシアケテ／袖ヲ押ヘテ／刀ヲ合ワス」等、さまざまな動きを修飾しているが、覚一本は、16例のうち「くむ」動作が9例、「とる／つかむ」に関する動作が4例となっており、動作とオノマトペの結びつきが強くなっている。百二十句本は、19例のうち「くむ」に関する動作が5例、「とる／つかむ」に関する動作が7例であり、覚一本に近い様相を見せる。特に覚一本は、以下に示すように類似した表現が多く見られる。

おしならべてむずとくむ 2例

おしならべ（て）むずと組んでどうどおつ 4例

おしならべ（て）むずととつておとす 2例

むずとくむでどうどふす 1例

覚一本において定型的表現が好まれるという傾向が、この例からも見て取れる。また、前項の「刀に関するもの」で、「ちやうど」「はたと」が一般的な擬音語であることを見たが、同じ語が力強い動作を表す際にも用いられている。

例19：かのひとつの大がしらに、いきたる人のまなこの様に大のまなこどもが千万いできて、入道相國をちやうどにらまへて、まだ、きもせず。入道すこしもさはがずはたとにらまへてしばらくたゝれたり。（覚）

先の例5は同じく覚一本で「はたと」「ちやうど」が刀で斬り合わせる描写として対になって用いられていたが、ここでも「ちやうど」「はたと」の2語が対応しており、覚一本が対句的表現を好むことが窺われる。

## ③泣く様子

延慶本：「サメザメト」21例、「ハラハラト」17例、「サト」4例

覚一本：「さめざめと」12例、「はらはらと」32例

百二十句本：「さめざめと」5例、「はらはらと」10例

例20：「今ハ我身トテモナガラフベシトモ不<sup>のたまひ</sup>覚ト宣モアヘズサメトゾ泣給フ。（延）

例21：「ゲニモ」トヤオボサレケム、又ハラト泣給ヘバ（延）

例22：左右の袖をかほにをしあてて、涙をはらと流す。（覚）

三本とも「さめざめと」「はらはらと」が使われる点では同様だが、延慶本では「さめざめと」のほうが多く、語り本系の二本では「はらはらと」の方が多く見られた。特に覚一本に「はらはらと」が多用されている。動詞との結びつきを見ると、稿末の資料にも示した通り、以下のようになっている。

「さめざめと」延慶本：「泣く／うち泣く」20例 「涙を流す」1例

覚一本：「泣く」9例 「かきくどく」3例

百二十句本：「泣く」4例 「かきくどく」1例

「はらはらと」延慶本：「涙を流す」2例 「涙を落とす」4例 「涙をこぼす」1例

「泣く」9例

覚一本：「涙を流す」29例 「涙がかかる」1例 「泣く」2例

百二十句本：「涙を流す」5例 「涙がかかる」1例 「泣く」4例

延慶本に「さめざめと」が多く見られるが、これは、覚一本・百二十句本には書かれていない挿話に使われていることに加えて、覚一本・百二十句本で省略されている場合があるためである。

例23：「平家ノ小松三位中将殿ノ北ノ方ノ（中略）武士共来テ、取テ『六波羅へ』トテ罷ニキ。何か成給ワムズラム」ト云モアヘズ、サメト泣ク。（延・卷十二）

例24：「平家小松三位中将の北方の、(中略) 武士のとりまいらせてまかりさぶらひぬるなり」と申す。(覚・卷十二)

\*百二十句本の卷十には該当箇所無し。

また、覚一本において、「さめざめと」は「泣く」行為、「はらはらと」は「涙を流す」行為、と使い分けられている。例えば以下の例のように、延慶本では「はらはらと泣く」という例が見られるが、覚一本では「さめざめと」になっている。

例25：都へ帰り、命ヲ助カリ、<sup>をさなき</sup>少者共<sup>かへりみよ</sup>ヲモ顧」ト宣へば、二人ノ者共ハラト泣テ(延・卷十)

例26：いそぎ宮こへのほり、おの<sup>を</sup>が身をもたすけ、かつうは妻子をもはぐくみ、かつうは又惟盛が後生をとぶらへかし」とのたまへば、二人の物どもさめとないて(覚・卷十)

## 5. 漢語系オノマトペの特徴

各本に見る音の描写(擬音語)・擬態語の延べ語数、異なり語数を以下に示す。(漢語は音を描写するものを擬音語と同じ名称にせず、「音の描写」とする。)

諸本		オノマトペ	音の描写	擬態語
延慶本	異なり	71	9	62
	延べ	134	15	119
覚一本	異なり	20	3	17
	延べ	31	3	28
百二十句	異なり	24	3	21
	延べ	37	3	34

いずれも、音の描写に比べて圧倒的に擬態語が多く、種類も多い。延慶本では他の二本に比べて4倍近い数の漢語系オノマトペが用いられている。延慶本の場合、和語系オノマトペが異なり語数63語、延べ語数153語であることと比べると、延べ語数では和語系よりやや少ないが、異なり語数は漢語系オノマトペのほうが多く使われている。延慶本の漢語系オノマトペについては先にまとめたので、ここでは覚一本と百二十句本についてまとめる。

まず、音の描写を見てみると、覚一本でも百二十句本でも3例あり、全て重なっている。波の音を表す「茫々」、風の音を表す「索々」、涼風を表す「颯々」である。これらは延慶本にも同じように使われている。延慶本では、他に楽器の音、雨の音を表す漢語系オノマトペが見られたが、語り本系の二本には見られなかった。

次に擬態語を見てみたい。覚一本と百二十句本では擬態語のほとんどが重なっている。多くは、「峨々」「漫々」のように、山、海など自然を形容する語であった。これは、漢語系の多い延慶本も同様で、中里(2010)で指摘したように、作品の舞台に海や河が多く登場することと、これらに該当する和語系オノマトペが古語のオノマトペの範囲にほとんど見られないことが関わっているだろう。人物描写や心情に関わるものよりも、自然描写に関わるものが多いことは、漢語系オノマトペの大きな特徴であろう。

二本を比べて覚一本にだけ見られたのは「曠々」、百二十句本にだけ見られたのは、「をんをん」「しんしん」「やうやう」「れきれき」である。これらのうち、延慶本にも見られなかった語は、覚一本の「曠々」、百二十句本の「れきれき」であった。覚一本の「曠々」は、同じ箇所では延慶本では「広々」と書かれ、意味上も同じ使われ方をしており、覚一本に独特のものではない。百二十句本の「れきれき」は、「十まん人のそうどもまいりあつまり、れきとして、をのどくきやうす(卷六)」と使われており、他の二本にはない箇所である。「歴々」は『義経記』『曾我物語』にも1例ずつ見られ、『日葡辞書』にも載っている語であり、特異な漢語ではない。

擬態語で注目されるのは、覚一本の中で「かくやく」「せいせい」「へいへい」の三語がひらがな表記されていることである。

例25：あゆみの板をひきならべわたひたれば、舟のうへはへいたり。(卷八)

例26：漠々たる寒嵐の底、旅泊に臥て夢をやぶり、せいたる微陽のまへ、遠路に臨で眼をきはむ。(卷五)

例27：内侍所はみづから炎のなかをとびいでさせ給ひ、南殿の櫻の梢にかゝらせおはしまし、光明かくやくとして、朝の日の山の端をいづるにことならず。(卷十一)

3例のうち、例26は願文において漢文訓読調の文章の中で使われているため、漢語としての意識は強いと思われる

が、例25と27は地の文に使われており、漢語の意識が薄れているように思われる。「へいへい」「かくやく」は『日葡辞書』に掲載されている語であり、語り本系の本文としても違和感なく使われていたと考えられる。

延慶本にも、漢語系オノマトペが漢字表記ではなくカタカナ表記されている例が2例あった。

例28：文学答<sup>こたへていはく</sup>云「(略)カヤウニ文学ハ心ソウ<sup>ソウ</sup>ニシテ、物狂シキ様ニハ侍レドモ、父ニモ母ニモ孤<sup>みなしご</sup>ニテ候之間、親ヲ思フ志今ニナヲアサカラズ。(巻五)

例29：衆僧等、西北ノ方ニ向テ、空ヲ飛テ炎魔羅城ニ至ル。王宮ヲミルニ、家中ベウ<sup>ベウ</sup>トシテ、其ノ内広々タリ。(巻六)

漢字表記の漢語が多い延慶本において漢字表記されていないことは、文章語としての漢語の意識が薄れていることをうかがわせる。「ソウソウ」「ベウベウ」は『日葡辞書』に掲載されている語であり、話し言葉としても広く使われていたことがうかがえる。例25～29の例から、漢語系オノマトペの中には、和語系オノマトペが生き生きとした描写であるのと同様に、状況を生き生きと伝える働きをしていたものがあったのではないだろうか。

覚一本の漢語系オノマトペ20語(異なり語数)のうち、『日葡辞書』に掲載されているものは12語、百二十句本は、24語中15語が辞書に掲載されている<sup>12)</sup>。延慶本は72語中26語であるのと比べて、語り本系には漢語の中でもより一般的なものが使われていると言つてよいだろう。

## 6. まとめと今後の課題

読み本系と語り本系とで、擬音語・擬態語(オノマトペ)使用の様相が異なっていることが見て取れた。和語系オノマトペに関しては、語り本系は、延べ語数の上では読み本系よりも多く、オノマトペの使用が目立っている。語り本系で異なり語数が少ない割に延べ語数が多いのは、定型的表现が多いことによる。特に覚一本では、弓矢の音や力強い動作、泣く描写などで定型的表现が多く、オノマトペが生き生きとした描写のためというよりも、反復される表現のリズムを生み出すために使われている側面があるのではないだろうか。生き生きとした描写という点から見れば、延慶本には「内大臣、聊<sup>いささか</sup>モ憚ル氣色ナク、ユラ<sup>ユラ</sup>ト歩ミヨテ」「向ノ屋ノ中門ノ程キイリトナリケルガ」のように、様々な場面で独特のオノマトペが使用されており、読み本系のほうが多様なオノマトペが見られる。延べ語数の上では語り本系より少ないが、異なり語数は多く、状況に応じたオノマトペを使っていることがわかる。また、三本に共通した和語系オノマトペからは、「平家物語」のオノマトペの特徴が見て取れた。擬音語は、弓矢に関する音の描写は工夫されているが、刀に関する音の描写は他の擬音語を代用していること、擬態語は、素早い動作と力強い動作を表すオノマトペに関しては、当時の一般的表現であったと思われることなどである。漢語系オノマトペは、読み本系に多く見られ、種類も豊富であった。語り本系は、数と種類に限られており、より一般的な漢語を使う傾向にあった。読み本系も語り本系も、主に自然描写の際に漢語を使って状況を表現していた。

今回は、使用例の多いオノマトペを中心に、諸本の使用例を簡単に比較したが、オノマトペの使用場面の対照なども必要になると思われる。今後は比較・対照のしかたをさらに検討するとともに、読み本系の長門本、源平盛衰記を調査し、読み本系と語り本系の違いをまとめていきたい。

以上

## 【注】

- 1) 山田孝雄『平家物語の語法 下』(1954年・寶文館。初出は1914年『平家物語につきての研究 後編』)に、「寫音または擬聲の「エイ」「ヲウ」「カラカラ」「ハ」「ト」「カハ」「カフ」「カラリ」「キクリ」などの用例に頗る多き」とある。また、日本古典文学大系『平家物語 上』(1959年・岩波書店)の「解説」で、「平家物語を特徴づけている語彙」の一つに「擬声語・擬態語」を挙げている。
- 2) 『平家物語の文体論的研究』第二章「平家物語の文体研究」38頁。西田は、「擬声語、擬態語、色彩語など感覚的な語」を取り上げ、「これらの語のとり入れ方によって、その説話、平曲の句、などの文体的印象が異なる」と述べているが、「擬声語、擬態語」を取り上げているのは、この語群が特徴的であることを示しているだろう。
- 3) 西田(1990)では、オノマトペを取り上げた研究に猿田(1976)と中里(1980)を挙げているだけであり、管見の限りでは、それ以後もオノマトペだけを取り上げたものは見られない。
- 4) 中里(2011)『延慶本平家物語』に見られるオノマトペ
- 5) 小川(2008)第1章「延慶本の書誌・成立」第2章「日本語資料としての延慶本」の記述による。小川は、長門本に古態を認める谷口耕一の説を紹介しつつ「谷口も認める通り、全体としては延慶本の方が古態を示すものであろう」と述べる。さらに「現存する平家諸本の中で鎌倉時代の日本語史料として確実視できるのは延慶本だけである」という。近藤(1989)も「増補系諸本のうちでは、延慶本が完本としては現存最古のものである」としている。



- 6) 筆者は、和語のオノマトペを和語系オノマトペ、漢語由来のものを漢語系オノマトペと称しているが、本来は現代語において和語のオノマトペに近い働きを持つもの（例えば、「さんさんと」「らんらんと」「ごうごうと」等）に対して「漢語系オノマトペ」と呼んでいる。ここで収集する純粋な漢語についてはふさわしくない名称かと思われるが、他の名称に代えると混乱を生じるため、便宜的に漢語系オノマトペと称する。
- 7) 覚一本の調査資料とした日本古典文学全集『平家物語』は、例えば「さ(ッ)と」「ざ(ン)ぶと」のように発音に合わせて促音や撥音を補って表記してある。抽出する際はそのまま抜き出すが、「さ(ッ)と」「ざ(ン)ぶと」は「さと」「ざぶと」と同類の語として扱う。
- 8) 表記の違いによる「オゾオヅ」「ヨヅヨヅ」、「キツト」「屹ト」等はそれぞれ同語と判断し、1語として扱った。
- 9) 擬音語にも擬態語にも見られたものは、延慶本が「ハト／ハタト／ハラハラト」、覚一本が「ちゃうど／はたと」、百二十句本が「ばつと」である。
- 10) 飛田良文他編『日本語学研究事典』（明治書院・平成19年）による。
- 11) 「郎等七八人、サトオリアフ（延慶本）」「中をさ(ッ)とあげてとをす（覚一本）」のように「さと／さつと」も兵や軍勢の動きを表しているが、動きの素早さを表す擬態語として扱った。
- 12) 百二十句本の「めいめい」は、「しやうじるてんのちまためい／たり」となっており、覚一本の「生死流転の衢冥々たり（覚一本）」と同じ箇所であることから「冥々（みょうみょう）」と判断した。また、「びうびう」は新潮社刊「日本古典文学集成」では「渺々」と書かれていることから、「べうべう」として『日葡辞書』にありと判断した。

### 【参考文献】

- 小川栄一 2008 『延慶本平家物語の日本語史的研究』勉誠出版
- 金田一春彦 1978 「擬音語・擬態語概説」『擬音語・擬態語辞典』（浅野鶴子編）角川書店
- 後藤英次 2006 「延慶本『平家物語』における記録特有語—記録特有語と口語資料（二）—」『中京大学文学部紀要』41号
- 近藤政美 1989 『中世国語論考』和泉書院
- 猿田知之 1976 「平家物語に現れた音象徴詞の性格」『立教大学日本文学』35号
- 菅原範夫 2000 『キリシタン資料を視点とする中世国語の研究』武蔵野書院
- 谷口耕一 1993 「延慶本平家物語の本文書写の実態について—巻一・巻三を中心に—」『千葉大学日本文化論叢』4号
- 中里理子 1980 「平家物語（覚一本）に見られる擬声語・擬態語—意味内容からの考察—」『ことば』6号
- 中里理子 2006 「オノマトペに見る漢語の影響—和語系オノマトペと漢語系オノマトペの関わり—」『上越教育大学研究紀要』25 巻2号
- 中里理子 2010 「大蔵流狂言台本に見る擬音語・擬態語の特徴—虎明本と山本東本との比較から—」『上越教育大学国語研究』24号
- 中里理子 2011 「延慶本平家物語に見られるオノマトペ」『上越教育大学研究紀要』25号
- 西田直敏 1978 『平家物語の文体論的研究』明治書院
- 西田直敏 1990 『平家物語の国語学的研究』和泉書院
- 兵藤裕己 1979 「軍記物の流動と“語り”—平家物語論のために—」『国語と国文学』56巻1号
- 水原 一 1979 『延慶本平家物語論考』加藤中道館
- 森田武編 1989 『邦訳日葡辞書 索引編』『邦訳日葡辞書 本文編』岩波書店
- 山下宏明 1983 「読みの文体—延慶本平家物語論のために—」『名古屋大学文学部研究論集』85号
- 山田孝雄 1954 『平家物語の語法』上・下 寶文館（初出1914年『平家物語につきての研究 国語史料鎌倉時代之部 [第3冊] 後編 平家物語の語法 下』文部省国語調査委員会）

#### 稿末資料：各本のオノマトペ（擬音語・擬態語）一覧

抽出したオノマトペを和語系と漢語系に分け、五十音順に整理した。〈 〉内は、オノマトペが表す内容（多くは、被修飾語にあたるもの）である。数字は二回以上現れた語に対して記した。

#### ○和語系オノマトペ

「さと」のような一音節語は紛れやすく、また、「丁（ちゃう）ど」のように「と」が濁音化している語もあるため、すべて「と」を付して示した。原文はカタカナ漢字交じり表記であるため、それに従い、漢字表記の場合には（ ）に読みを示した。〈 〉内については内容を表す場合にはひらがな表記、被修飾語を示す場合には原文の表記とした。

調査対象から外したのは次に該当するものである。

- 1) 「ぎぎめく」「どどめく」「ひひめく」など、接尾辞「めく」がつく動詞の形になっているもの。
- 2) 「きらきらし」など、形容詞の形になっているもの。
- 3) 「しぶしぶと」「やすやすと」のように、疊語形式であっても、語基部分（「渋い」「易い」など）の独立性が高く、さらに一般語彙として副詞的に多く用いられているもの。
- 4) 「つやつや」「ちとも」のように、陳述副詞であるもの。ただし、「ちとまどろむ」のように、情態副詞で様子・状態を表しているものは取り上げた。

5)「こまごま」「はるばる」など、畳語形式の後項が濁音化しており、語基部分が「こまかい」「はるか」のように一般語彙として意味を持つもの。例外として、「ほのほの」「さめざめ」のように語基の独立性が低いものはオノマトベとして扱った。

### ○漢語系オノマトベ

本節で述べたように、今回の調査では「同じ語根を重ねたもの」「同じ韻を持つ拍を重ねたもの」を対象とした。

### 延慶本のオノマトベ

#### ○和語系

##### 【擬音語】

アト2〈悦ブ・云イ合フ〉 ガブト〈海へ入ル〉 カラカラト2〈咲フ・タルヒガ鳴ル〉 カラリト〈薙刀で甲に当たてる〉 キイリト〈門の音〉 ザト13〈橋ノ上へ上ル・河ノ向ヒ側ニ着ク・アケテ通ス2・河ヲ渡ル・河ヲ渡ス2・引ク・馬ヲオロス・河へ打入レ・向岸ニノボル・引テノク・白旗ヲサス〉 ザツト6〈渡ル・打ワタス・渡ス・破イテ出ヅ・引キノク・汀へ馳上ル〉 サラト2〈刀ヲ抜ク2〉 サラサラト2〈念珠ヲオシモム・トカゲガ 匍フ〉 サラリサラリト〈矢ヲツマヤル〉 サワサワト〈下人や冠者原の様子〉 丁(ちゃう)ド4〈戸ヲ立テル・打折レテ・刀ヲ合ス・切ル〉 打(ちゃう)ド〈刀ヲ頸ヲツカフ〉 ツブツブト〈海ノ底ニ入ル〉 ドト3〈走りテ倒ル・時ヲツクル2〉 ドウド4〈落ツ3・倒ル〉 ドツト〈咲フ〉 ハト10〈咲フ8・時ヲツクル・押寄ス〉 バト2〈立上ガル・押寄ス〉 ハタト7〈勧請の句を打ち上げる・障子ヲ立テ・矢ガ当ル・手ヲ打ツ・射ル・刀が鞘にささる音・刀ヲ合ス〉 ハタハタト2〈爪ハジキ・鎧の水を打つ音〉 ハラハラト4〈扇ヲツカフ4〉 ヒフット〈射切ル〉 ヒヤウド〈矢ヲ放ツ〉 兵(ヒヤウ)ド7〈射ル7〉 ホトホトト2〈戸ヲタタク2〉

##### 【擬態語】

アザアザト〈残る〉 アラアラト〈山風〉 オゾオゾト〈戸ヲ開ケ〉 オメオメ2〈語ル・逃グ〉 キト13〈見ル2・召シテ進ゼヨ・立寄り給ヒ・オトナフ・思出シ・暇ヲタマワル・恥ニアフマジ・見回ス・渡シマイラセヨ・忍テアルカバヤ・目ヲ見合ス・見知ルマジキ〉 キツト〈見上グ〉 屹(きつ)ト〈押シ開カレ〉 クボクボト〈目ガ落入ル〉 クルクルト〈廻ル〉 サト8〈涙ガ浮ク・太刀ヲ抜ク・庭へ下リテ・オリアフ・ヒカル2・チル・二ツニサケ〉 サツト3〈障子ヲ開ケ・アケテ通ス・血ガコボレカカル〉 サメザメト21〈泣ク19・打泣ク・涙ヲ流ス〉 シヅシヅト3〈落行ク2・間フ〉 シトド〈乗下ガル〉 シトシトト〈ナデクダス〉 シホシホト〈直衣の様子〉 シヲシヲト3〈馬の様子・人が濡れた様子・渡ル〉 シャクト〈越ユ〉 スクスクト〈参ル〉 スルリト3〈渡ス・渡ル・指寄ル〉 チト7〈ヒラム・打マワル・カタムケヨ・マドロム2・息ガ通フ・寝入ル〉 ツト29〈キリオトス・逃グ・入ル3・寄る10・出ヅ6・ノボル・参ル・通ル2・先立ツ・射スク・射出ス・オドリノク〉 ツクト〈立ツ〉 寸々(づたづた)ニ〈大蛇ヲ切ル〉 ツルリト〈食フ〉 ヌケヌケト〈取ラル〉 ハト〈興ザム〉 ハタト3〈ニラム2・懸ケ破ル〉 ハラハラト17\*1〈涙ヲコボス・涙ヲ落ス4・涙ヲ流ス2・泣ク9・哭ク〉 ヒシト3〈並ビ居ル・取付ク・面影ガ身ニ副フ〉 ヒシヒシト2〈思召シ立ツ・物の具をかためる〉 ヒタト4〈取ラヘテ・馬ニ乗ル〉 ヒラヒラト〈宝剣ガ光る〉 フット〈甲の緒を引きちぎる〉 フサフサト〈黒髪〉 房々(ふさふさ)ト〈御グシ〉 ホノボノト7〈夜ガ明ケル7〉 ミシト〈ダク〉 ムズト11〈取ル2・座ニツク・組デ落ツ・打ツ・キル・フム・引キアオノク・門ヲヲシアケ・袖ヲ押ヘテ・刀ヲ合ワス〉 ヤミヤミト〈ナル〉 ユラユラト3〈歩ミ寄ル・黒髪・御グシ〉 ヨロヨロト〈立つ〉 ワナワナト〈フルヘテ〉 ワラワラト〈破レタル〉 ヲゾゾト〈伺ヒヨル〉 ヲメヲメト3〈居ル・降人ニナル・ナル〉 ヲロヲロト2〈見ル・引退ク〉

#### ○漢語系

##### 【音の描写】

索々2〈風の音・絃〉 颯々〈涼風〉 瑟瑟〈松風〉 肅々〈雨の音〉 蕭々〈雨の音〉 嘯々〈雨の音〉 竊々4〈小絃2・絃2〉 錚々〈絃〉 糟々3〈大絃2・絃〉\*2

##### 【擬態語】

愛々〈顔〉 依々〈恨ミ〉 陰倫〈西日〉 喬々〈海中にいる様子〉 炎々〈ほのお〉 遠々〈過去〉 岷々8〈巖路・松山・山4・青山・翠嶺〉 嚇々〈体〉 赫奕3〈海上・光・光明〉 閑閑〈鶯語〉 緩々〈聞キ居ル〉 巍々〈威徳〉 急々〈下流〉 皓々〈風〉 耿々3〈燈・露の駅・残燈〉 広々〈家の内〉 澁澁〈松〉 寂漠〈山 家〉 舟々〈浮かぶ〉 蕭々〈秋の夜〉 壤々〈露〉 瀼々〈海水〉 讓々〈露〉 深々〈人もなく〉 森々〈巖松〉 寸々〈愁腸〉 凄々〈微陽〉 勢々〈卿相雲客〉 掣々〈波上に居る〉 忿々〈胸の火〉 蒼々3〈天心・月・翠〉 蕨々2〈山2〉 湛々〈水〉 潭々〈深淵〉 団々〈池〉 遲々〈春日〉 沈々2〈雲海2〉 滔々3〈清水・河水・浪音〉 堂々〈尊容〉 漠々〈寒嵐〉 ひつひつ\*3〈枝〉 眇々9〈浜路・蒼波2・前路・磯・野・眺望・風・山〉 森々\*4〈雪水〉 平々〈板片々5〈煙3・霞・余炎〉 茫々5〈海上・月ノ影・流れ・碧落・波〉 漫々16〈湖上2・海4・蒼海4・海上4・激海・波〉 万々〈下流〉 明々4〈文道・光2・影〉 冥々2〈天闇ク・流転の衢〉 綿々2〈恨みの心2〉 熊々〈悲しみの涙〉 悠々〈生死〉 幽々2〈橋桁・春雨〉 葉々〈草〉 幼々〈哭ク〉 漸々〈未来〉 乱々〈時〉 靈々〈錦帳〉 冷々〈風〉 連々〈涙〉 老々3〈人の様子〉 ソウソウニ〈物狂わしい様子〉 ベウベウト〈家中〉\*5

- \* 1 「ハラハラト」は「咲(わらふ)」に係る例が1例あったが、頭注に「右に「哭歎」と傍書あり」と書かれているため、それに従った。
- \* 2 本文に「糟々竊々」とあったが、「糟々」と「竊々」にそれぞれ分けて示した。
- \* 3 「ひつ」は「風」に「必」と書く文字。
- \* 4 原文では別字。「水」の下に「朶」と「取」。頭注に「読み未詳」、他字の誤写かとある。「北原本は「森」とする」とあり、それに倣った。
- \* 5 「ソウソウニ」「ベウベウト」の二語は、カタカナ表記されている。意味の上から「忿々」「吵々」と同語と考えられるため、異なり語としては数えない。

### 覚一本のオノマトベ

#### ○和語系

##### 【擬音語】

あつと〈喜びあう声〉 からと〈弓を投げ捨てる〉 かりりと〈投げる〉 かりりかりりと〈熊手を甲にうちかける〉 かりからと〈笑ふ〉 ざ(ッ)と20〈わたす4・押し落とす・旗を揚げる・御簾をかきあげる・旗をさしあげる3・河へうち入れる2・岩浪が手先へおしあげる・うちいれる2・軍を落とす2・軍を引く3〉 ざ(ン)ぶと〈河へ入る〉 ちつと〈横笛を鳴らす〉 ちやうど5〈障子を立てる・きる・太刀が折れる・刀をあわす2〉 とうど9〈落つ6・馬が倒る・蹴いれる・ふす〉 ど(ッ)と20〈時をつくる14・二三十人が笑ふ2・千人ばかり笑ふ・(一人で)笑ふ2・敵も味方も一度に笑ふ〉 はたと5〈きる・あたる・うつ2・霊剣が鳴ってさやにささる音〉 は(ッ)と2〈一同に笑ひあふ・笑ふ〉 ば(ッ)と4〈一度に鳥が立つ羽音・百余人押しよす・二三十人押しよす・二三十人がよる〉 ひ(イ)ふつと2〈ぬきる2〉 ひやうづばと〈射る〉 ひやうふつと5〈よっぴいて射る3・射る2〉 ひやうど6〈よっぴいて射る3・よっぴいて放つ3〉 ほとほとと3〈戸を叩く2・門をたたく〉

##### 【擬態語】

あざあざと〈みえる〉 おめおめと2〈逃げ上る・降人にまいる〉 か(ッ)ばと〈起きる〉 がはと〈飛び乗る〉 き(ッ)と7〈命令形:参れ2・立ち寄り給へ2・具し奉れ・とって参れ・見て参れ〉 き(ッ)と6〈見上ぐ・みまはす・おもひいだす・見る・押し戻す・見分く〉 くつと〈刀が抜ける〉 ぐ(ッ)と〈つく〉 くだくだに〈きる〉 くるりと〈ふみかへす〉 さ(ッ)と7〈障子を開ける・投げる・庭へおりる・ひかる2・あけて通す・散る〉 さめざめと12〈かきくどく3・泣く9〉 さらさらさらと〈走り渡る〉 ちと〈うちまどろむ〉 ち(ッ)と5〈まどろむ3・立ちやすらふ・ひるむ〉 ちやうど2〈にらまへる2〉 つと3〈よる・はせぬく・いでく〉 つ(ッ)と19〈参る3・いでく3・走りとおる2・うしろへいづ・のがれる・うちとほる・はせぬく・射貫く3・射わたす2・こぎよす・海へ入る〉 つくづくと〈待つ〉 づんど〈肩をおどりこえる〉 はたと3〈にらまへる・つづく・まもる〉 はらはらと32〈涙を流す29・泣く2・経に涙がかかる〉 ひしと4〈面影が立ち添ふ・続く・とりつく・ひたてる〉 ひしひしと4〈おぼしめしたつ・武者たちが落ち重なる・つまどりして退く・くつばみを並ぶ〉 ひたひたと2〈馬にのる2〉 ひらひらと〈霊剣の光るさま〉 ふつと2〈切り落とす・ひっきる〉 ふつふつと〈大綱をうちきる〉 ほのぼのと3〈夜が明ける3〉 むずと16〈くむ9・とりつく・ひかへる・とってひきおとす2・のりかかる・つかむ・きる〉 むずむずと〈足で踏む〉 ゆらゆらと〈御ぐし〉 ゆらりと〈飛び乗る〉 よろよると〈出でくる〉 わなわなと〈震ふ〉

#### ○漢語系

##### 【音の描写】

茫々〈波の音〉 索々〈風〉 颯々〈涼風〉

##### 【擬態語】

隠淪〈波〉 岷々6〈山岳・嶺・嶮難・青山2・巖石〉 嶮々〈谷〉 曠々〈王宮の内〉 皓々〈白雲〉 傲々〈躰=態度〉 晃漾〈影〉 蒼々〈天心〉 沈々〈雲海〉 漠々〈寒嵐〉 渺々2〈王宮の外廓・平沙〉 茫々〈天水〉 漫々6〈海・海上2・蒼海・大海・波路〉 冥々〈生々流転の衢〉 かくやくと〈光明〉 せいせいと〈微陽〉 へいへいたり〈舟の上〉

### 百二十句本のオノマトベ

#### ○和語系

##### 【擬音語】

あつと〈よろこぶ〉 からと〈なげすてる〉 かりからと〈剣がたふれる〉 ざつと19〈わたす2・おしおとす・旗をさしあげる5・みすをかきあげる・うちいれる2・かけやぶる・おとす・ひく3・あけてとおす・落つ・ちる〉 ざぶと〈かはへいる〉 ざんぶと〈海へけいれる〉 ちやうど4〈きる・刀が折れる・つく・うつ〉 とうど〈おつ〉 どつと20〈ときをつくる11・ときをあはす・わらふ8〉 とどろと〈ふみならず〉 はたと2〈障子をたてる・きる〉 ばつと〈一度にたつ〉 ひやうど3〈いる3〉 ひやうふつと2〈いきる・いとをす〉 ほとほとと3〈戸をたたく2・門をたたく〉

## 【擬態語】

ありありと〈うつつ〉 おめおめと3〈もとどりはなつ・めされる・ぐせられ〉 かつぱと2〈おきる2〉 きつと5〈申しあはすべき事・ぐしたてまつれ・たちよりたまへ・～とってまいれ・かんがへ申せ〉 きつと5〈みまはす・めを見あはす・おもひいづ2・をしなおす〉 さつと7〈前をたつ・障子をあける・なげかける・庭に降りる・ひかる2・わたす〉 さめざめと5〈かきくどく・なく4〉 さらさらと〈はしりわたる〉 ちと6〈まどろむ・たちやすらふ・ひるむ・ひらく・力つく・うちふす〉 つと13〈よる4・いづ3・はせぬく・のぼる・うちのびる・はせのびる・はしりすぐ・いわたす〉 つつと3〈まいる2・よる〉 つくづくと〈嘆き暮らす〉 つんと5〈いづ・まいる3・いとおす〉 づんと3〈はしりいづ・とをる・いる〉 はたと2〈にらまへる・つづく〉 ばつと〈消える〉 はらはらと10〈涙をながす5・なく4・なみだがかかる〉 ひしと2〈心にかかる・身にとりつく〉 ひしひしと3〈おぼしめしたつ・とる・とりつく〉 ひたひたと2〈のる2〉 ふつと2〈いきる・ひききる〉 ふつつと〈たつ〉 ふつふつと〈きる〉 ほのほのと6〈夜が明ける6〉 むずと19〈くんでおつ・なげかける・くむ4・よせあはす・とりつく3・つかむ2・とってひきおとす2・のる2・だく・おさへる・なかにへだたる〉 やみやみと〈負ける〉 ゆらと2〈馬にのる・とぶ〉 ゆらゆらと〈御ぐし〉 ゆらりと〈こえる〉 よろよると〈する=いできたり〉 わなわなと2〈よみあぐ・ふるふ〉

## ○漢語系

## 【音の描写】

ばうばうたり〈波〉 さくさくたり〈風〉 さつさつたり〈りやうふう〉

## 【擬態語】

ゑんりんたり〈なみ〉 をんをんたり〈かこ〉 ががたる／と6〈さんがく・みね・せいざん2・たに・がんぜき〉 かくやくと〈くはうみやう〉 けんけんたる〈たに〉 かうかうと〈はくうん〉 がうがうなる〈てい〉 くはうやうたり〈かげ〉 さうさうと〈天心〉 しんしんと〈山ふかし〉 せいせいたる〈びやう〉 ちんちんと〈うんかい〉 ばくばくたる〈かんらんのそこ〉 ばうばうと〈天水〉 びうびうと〈かぎりなし〉 へいへいたり〈ふねのうへ〉 べうべうたる〈へいち〉 まんまんと／たる8〈かい2・おき・かい上2・さうかい・たいかい・こしやう〉 みやうみやうと〈ひともなし〉 めいめいたり〈しょうじるてんのちまた〉 やうやうたり〈未来〉 れきれきたる〈十万人の僧〉

# Onomatopoeia in *Heikemonogatari* —Comparing with Enkyo-bon, Kakuichi-bon and Hyakunijikku-bon—

Michiko NAKAZATO\*

## ABSTRACT

It investigated for Enkyo-bon, Kakuichi-bon and Hyakunijikku-bon to see the characteristics of the onomatopoeia of *Heikemonogatari*.

As for onomatopoeia of Japanese origin, imitative word was compared from three points of the following; sound about bow and arrow, sound about sword, sound about many movements around the forces and the soldier, and mimetic word compared from three points of the following; quick movement, powerful movement, the state that cries. It found out the characteristics of the onomatopoeia of *Heikemonogatari* from the common point of each book. The description of the sword substitutes other onomatopoeia though the description of the sound of the bow and arrow is devised. And the mimetic word which showed a quick movement and a powerful movement was a general expression in those days. On the other hand, it found that an expression was outstanding in Kakuichi-bon concerning a fixed form from the difference in each book.

As for onomatopoeia of Chinese origin, a master was using for the description of nature with each book as well. Two texts for oral chanters were a fewer words than Enkyo-bon which is in the line of texts for silent reader, and general Chinese word was being used for it.

---

\* Humanities and Social Studies Education